

ている地域もある。したがってこれらの理論的シエーマ化が果して妥当するかどうかは疑問であると思われる場合も少くない。

たとえば、さしあたり「家族労働力を一人以上有し、かつ農業所得による家計費充足率が一〇〇%内外の農家」を「中農」と規定すれば、ここで問題とする菊池川中流域の七城町下橋田部落においては、第一表に示すようにこれら「中農層」が部厚く（全部落農家の六割を占めている。詳しく述べる。卷末の附表第一表の総括表を参照）存在している。

この調査研究の主たる課題は、これら部厚い「中農層」の成立基盤を単に経済的なおくれ、または後述する立地条件の所産に帰するのではなく、生産力の形成過程として歴史的に考察するとともに、これら「中農層」の農業展開が現時点で直面している問題点を明らかにすることにある。

### 農法展開と村落

水本忠武（九州大・農学部）

現在の我国の農業は、戦後未曾有の「高成長」、「強蓄積」を押し進めてきた我国資本主義の蓄積構造に深く包摂され、さまざま矛盾を呈してきている。

それは具体的には資本による労働力、土地、土地利用等の包摂が一層深まる中で、兼業深化や広範な農家経営の「解体化」や農業經營の「崩落」という形であらわれてきている。

こういう現実は一方において「日本農業の解体」としてとらえられ、又、他方においてはすでに「農家」という形態での生産主体は崩壊し、

それにつれて新しい生産主体としての「小企業農」が生み出されつつあるというとらえ方もなされている。しかしながらこのような条件のなかでお生産力を高めつつある家族經營がかなり部厚い層をなして存在し

当地域は藩政期においてすでに高い生産力を形成し、維新後には日本農業的一大画期をなす「明治農法」の形成に多大な影響を与えたいわゆる「肥後農法」の発祥地であり、しかも畑作においては一年三作の集約的作付体系を形成してきている先進地域である。

調査地である下橋田部落はそういう先進地域の一角にありながらも、水田の土地条件は排水不良の低湿地を多く残した劣等地的性格から脱しきれずにいたが、明治期の耕地整理によって「肥後農法」の形成地盤を確立し、さらにそれにとどまることなく、自作農、自小作農を中心とする共同労働に基づく「部落的」土地改良を積み重ね、自らの生産力基盤を豊富化する歴史過程が連続するという独自性を有する。

熊本県菊池郡七城町橋田部落を例にとり、ここでの農法の展開・現段階とのかかわりで部落をみていくたいと思います。ここは、小作料率がかなり高い。相対的に面積が少ない。そこから主食として麦の重要性が出て、麦の作付面積の拡大・增收を計るということが、部落の農家の結

集の基礎となつてゐた。そこで、明治期に行なわれた土地改良を、再度、昭和期にやることになつてくる。昭和期の土地改良は部落の耕地の乾田化を意図した。そのことによつて、稻作・麦作・ばつかん・綠肥・大豆の增收をもたらした。戦後部落の中では、米アラスター・タバコという經營タイプをえるものが出てきた。この經營タイプには、家畜がないので、「踏ませわら」という形をとつてゐる。わらを家畜のいる農家にもつて、いつて踏ませて、自分の田に還元する。そういう関係が形成する。これは賃金支払い関係等々はない。部落の中だからやりやすいという話であつた。

もう一つは、農業用水をどのようにやつていたのかという問題だが、「苗代寄合」、「田植寄合」、「中干し寄合」、「いで寄合」、「いで寄合」、「田植寄合」などである。部落の經營が分化して、それに対応しながら、矛盾を解決している姿があらわれてゐる。

この部落では、モミスリ班が、四班あつて、協業を組みながらモミスリをやつしていく。費用は非常に安い。ライスセンターにすると、モミスリ協業でやる一〇倍くらいののではないかと思われる。今、そういう問題が具体的につきつけられてゐる。その他の小組合が部落内にあつて、事業をしている。それから、愛農会がある。水利組合、それから部落機構としては書かなかつたが、ここ肥後では、年行事という部落の役職があつて、これが部落の生産・生活にかかわつた任務をひきうけてや

つてゐる。こういうのが、だいたい部落の中にあるものです。

以上のように、この部落は、部落を単位として、土地改良をつみ重ねてきた。これは実は乾田化の歴史であるし、乾田化を進めた上で、經營方式の集約化が進められ、現在でも農業解体ではなくて、自作農的土地位所有の中に、できる限りの生産力を盛り込んでいく姿があるというふうに理解したい。しかしながら、それは前途洋洋たるものではない。直系労働力の商品化・流出が進んできている。農業が長期産業である限り、世代継承をきちんとやっていかねばならないが、その矛盾が、かなり出でてゐる。直系労働力の商品化にみまわれたのは、基本法農政以後のことだが、労働力が商品化されたことによつて、次に部落が、どのように再編されるのか、というのが課題である。

愛農会は一世代前の現世帝王が、部落的な連帯関係で農事研究をしながら、しかも、部落の生産の基盤である土地と水とを豊かにしてきたが、この世代の次の代で、部落の再編がどのように可能となるのか、どういう型があるのかということが、課題となる。